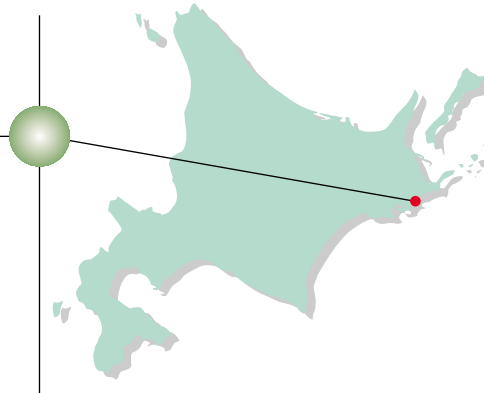


# 浜 中 町

浜中町  
 面積：427.65km<sup>2</sup>  
 人口：7,497人（平成15年1月1日現在）  
 町の花、木、鳥：エゾカンゾウ(花)、シラカバ(木)  
 エトビリカ(鳥)  
 町名の由来：砂浜の真中の意味  
 ホームページ：<http://hamanaka@hokkai.or.jp>  
 メールアドレス：[hamanaka@hokkai.or.jp](mailto:hamanaka@hokkai.or.jp)



企画財政課長

**内村 定之**

浜中町は、釧路地方の最東端に位置し、厚岸町・別海町・根室市に接し、東南は太平洋に面して霧多布半島を形成しており、厚岸道立自然公園の一角をなしている。陸部は、中央を東西に走る鉄道、南部は森林、牧草地帯、北部一帯は酪農地帯で平坦な丘陵原野を形成している。

この地に和人が足跡を印したのは、遠くは寛永年間(1627年以降)であり、元禄14年(1701年)に厚岸場所を割いて、松前藩のキリタツ場所が開かれたのが町のはじまりで、まさに海から開かれたまちです。

明治2年7月、函館に開拓史が設置され、同月蝦夷は北海道と改められたが、この時から当地方は佐賀藩の支配地となった。同藩では、12戸の農工民を移住させ、この人たちが本町における定住者のはじめとなった。以来、明治39年霧多布ほか1町4カ村を合わせて浜中村と改め、2級町村制を施行、大正8年には1級町村制を施行し、国鉄根室本線が開通、大正6、7年ごろから農業定住者が入りはじめ、同12年に114戸の農家が入った。昭和30年に茶内原野地区を中心として、高度集約酪農経営地帯の指定を受けて本格的な農業経営がはじまり、漁業においても昭和22年霧多布港の築設工事に着手し、同31年に散布漁田開発基地の指定を受けた。

また、昭和27年に十勝沖地震津波、昭和35年チリ沖地震津波の二大災害に見舞われたが、災害後は20キロにおよぶ防波堤の建設もされ、驚異的な復興を成し遂げました。

昭和38年8月に町制施行、昭和53年10月には開基100年を迎えた。その後も、平成5年に釧路沖地震、平成6年には北海道東方沖地震の連年災害を受けた。これらの災害にいち早く避難ができるように、海岸方面に防災行政無線が設置された。

平成10年には120周年を迎え、町民が安心して暮らせるよう津波防災ステーションの建設

や、快適な住環境を守るために下水道事業などにも着手しながら、21世紀のまちづくりに向けてまい進しています。

## 日本一の原生花園

霧多布湿原は、約67キロにおよぶ海岸線の中心部に南北約9キロ、東西約3～4キロの弓形の地形を呈しており、面積は3,168ヘクタールの広さをもち国内3番目に大きい湿原で、この中央部803ヘクタールには「霧多布湿原泥炭形成植物群落」として、大正11年に国の天然記念物に指定されています。また、平成5年に水鳥の生息地として価値が世界的に認められ「ラムサール条約登録湿地」として認定されました。さらに、平成13年に湿原の保全活動に努めたことが評価され、「北海道遺産」として選定されました。

霧多布湿原を訪れる観光客は、年間40万人程度と言われおり、人間の生活圏にある原生花園としては日本有数の規模を誇っています。湿原を代表するエゾカンゾウなど、約200種の野生の花々やタンチョウヅルをはじめとする約230種類の鳥が確認されています。中でも、「ヒンジモ」という珍しい水草や「トウキョウトガリネズミ」という大変珍しいモグラの間も発見されています。

湿原のそばには私たちの生活があり、美しい景観と価値ある湿原は、町民の誇りであり次世代に継げる財産でもあります。



琵琶瀬展望台から霧多布湿原を一望

## 湿原と森が産業を支える

産業の主軸は、漁業と農業の二大産業からなり、漁業はコンブ漁を中心に沿岸海域での魚介類とサケ・マスの漁などを中心とした沖合い漁業に分けられる。近年は、栽培漁業を推進し、前浜や湖沼などを活用した魚類資源の増大を図り、新たな漁業振興の可能性を模索しながら、海を耕し、つくり育てる漁業の振興を図っています。

最近の研究では、森がなくなると海藻や魚がいなくなり、海が砂漠のようになってしまうことがわかってきました。湿原や森から流れ出る鉄などのミネラル成分が、海藻の成長に大変役立っており、霧多布湿原の存在が生産高日本一のコンブ漁を支えているのは間違いないようです。

今では根拠が明らかにされ、魚付林の造林が盛んに行われています。植樹祭は、町と「お魚殖やす植樹運動」を推進している漁協婦人部との共催で実施され、ミズナラ2,800本とイタヤカエデ200本を280人が参加して植樹しました。

農業では、足腰の強い酪農を目指して昭和45年から国営総合農地開発事業に着手し、平成3年に完了して現在では年間生乳9万トンを生産する酪農王国に成長しました。

また、全国にさきがけて乳質、土壌、飼料などの分析を行う酪農技術センターをもって生産技術を高める取り組みや、新規就農者研修牧場を核に農業者の技術向上などに取り組み、農業の活性化を図っています。

湿原や海岸、牧場周辺に群生する原生林は浜中町の面積の38%を占め、保水力の高い広葉樹や針葉樹などが自生しています。その河川の上流域の一次産業として、河川流域への植林事業を実施して、環境保全などを積極的に進め、消費者に安全で安心を届ける食糧供給基地として、クリーンな農業経営を目指しています。

## 環境への取り組み

町立霧多布高等学校では、地域の環境を学ぶ取り組みの一環として、全校生徒で学校の周辺や湿原を横断する道路沿いのごみ拾いを行っています。生徒一人ひとりが、大切な郷土の自然環境保護の意識を高めるのにつながるこ



生徒による湿原の道路沿い清掃

とで実施しています。

浜中町酪農振興会連合会（会員211人）は、消費者を意識した農村全域の環境美化活動に取り組み、地域の独自性を活かした手づくりの公園整備や、ひまわりを植えて国道景観を整備するなどの環境保全、住宅や牛舎周辺の美化、廃屋廃農機の撤去、遊休地への植林などの活動が認められ、北海道開発局が主催するコンクールに景観の部門で銀賞に選ばれました。また、浜中町出身の漫画家モンキーパンチ氏（ルパン三世）デザインのイラスト画を牧場の看板に使用するなど景観づくりに努めています。



姉別地区酪農振興会では、国道から姉別市街地区までの民有地約4キロにわたる道路沿いに、エゾヤマ桜950本を植樹し地域環境の整備を図っています。

浜中町フラワーマスター協議会が昨年5月に発足され、花のあるまちづくりを目指し、フラワーマスター17人とオブザーバーが中心となり、花いっぱいコンクールの審査や情報交換・実践活動を通して花のあるまちづくりを進めています。



花いっぱい運動の審査風景

## 自然と環境が調和するまちづくり

環境問題に対する意識の高まりを背景にして、自然を守り育てようとする機運が従来にも増して高まっています。町が事業所として与える影響が大きい職場であることから、環境への負荷軽減を図ることを目的としてのISO14001（国際環境規格）の取得や「家庭版環境家計簿」の配布など、自然環境に与える影響の軽減を図っています。

また、自然エネルギーを活用して、風力発電を稼働させ「霧多布温泉ゆうゆ」の補助電力として資源の有効活用を図るなど、クリーンなイメージを高め、循環型社会への転換を行政・地域・人が一体となって取り組んでいます。

本町の豊かな自然、農業と漁業を育みながら明日の浜中の将来像「輝ける恵みの大地と海はまなか～将来につなごう豊かな環境～」の実現に向けて努力しています。